

【発達障がいは発達する～フラッシュバック②～】

A男さんは、突然給食のメニューの納豆を食べると必ず下痢をするようになった。納豆が大好きな彼がこんな症状を呈するのは入所以来、初めてのことだった。原因究明にははなはだ困難を極めたが、下痢が始まったのが、前回の帰省のあとだということが分かって、母親に情報提供を求めることができた。すると、A男さんが母親の目を盗んで冷蔵庫の食材を物色し、そこに納豆があることを発見して、まさに食べようとしたその時に、母親にその姿を発見されて、重い糖尿病を患って、食事制限を受けてきた彼は、その場でこっぴどく母親に叱られたというのである。それ以来彼は納豆を食べると必ず下痢をするという状況に陥ってしまっていたのだ。彼は納豆を食べるたびに母の鬼の怒りの表情がよみがえって下痢を繰り返していたのではないかと考えられるのである（余談だけど、人間は怒りに触れると恐怖を感じて下痢をすることはよく知られている）。この時の対応は、「母親からの謝罪」である。母親から頭ごなしの叱責に対する丁寧な謝罪をされたことで、彼の「納豆を食べると下痢」は止まったのである。

彼にはこのようなエピソードがたくさんある。

その昔には、牛小屋の近くを散歩などで通ると、そのあと暴言、他害などの課題行動が頻発した。同じようにとり肉を食べたあとにも課題行動が頻発した。

亡くなった父親が「牛のように大きくて怖かった人」という情報を得ることができて、「牛小屋の近くには散歩でも、ドライブでも近寄らない」の約束のもと、決して怒らないという支援も相まって、数年後には牛小屋の近くを通ってもフラッシュバックを起こさなくなった。

とり肉の方は、どうも母親と関係がありそうで、本人の弁によれば「コッコちゃんのように突っつく人だ」ということで、さすがに生前は食べることができなかったが、これも叱らない支援と相まって、母親逝去のあと、10数年を要したが、とり肉を食べてもフラッシュバックが起きないようになったのである。

「牛」も「とり肉」も、とにかく「避ける、逃げる、近寄らない」が支援の肝だった。

フラッシュバックの心の傷は、身体にできた切り傷とかさぶたの関係を例に引くと分かりやすいのだが、まだ、かさぶたの下に薄皮ができないうちにかさぶたを剥がせば再び出血して、傷が痛み、またかさぶたができていくのを待たなくてはいけないように（もちろん、それを繰り返していれば、ずっと傷は治らないことになる）、心の傷が癒されないうちにまた同じような心の傷を負えば、再び心の傷からは血が出てずっと治らないというわけだ。したがって大切なことは、かさぶたが剥がれないように、しっかり保護して、かさぶたが剥がれても出血しないくらいにかさぶたの下の皮がしっかりできあがるまで同じような心の傷ができてしまう場面に遭遇しない、させないことが重要となるのだ。

だから、フラッシュバックは度々繰り返されれば、ずっと心の傷は癒されないということになる。いつでも出血状態というわけだ。

彼は、猫もダメだった。聞くと、生まれたばかりの子猫を川に流したことがあるという。「子猫を殺してしまった」場面の苦しさ、悲しさ、罪悪感が猫を見るとフラッシュバックするのだろう。さすがに園内をうろつく猫を避けることは難しかったので、一計を案じた。

私たちは、彼がとても信心深いことを知っていたので、死んだ子猫の供養をすることにしたのだ。

「川に流してしまつてごめんね。許してください。」と書いた紙と子猫の絵を地中に埋め、その上に石を置いて、線香を焚いて、何回も、何日も「南無妙法蓮華経～」を唱えたのだった。こうして彼の猫に対するフラッシュバックは消えていった。

フラッシュバックの起因となる記憶は、帯状回という脳領域が記憶の消去を失敗することで生じるらしいが、その治療は専門家でも困難を極めるらしい。まずは「三十六計逃げるに如かず」というところではないかと、私は信じている。